

国語国文学会だより



No. 34

2006. 4

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十七年度秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十七年度秋季大会を十一月二十六日(土)、百年館低層棟五階百五〇四教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表) 十時～十二時

〈野宮〉の六条御息所像

本学博士課程前期一年次 井上 愛氏
岡本かの子『渾沌未分』論

——小初の希求したもの——

本学博士課程後期一年次 近藤華子氏
『少女地獄』——少女の遺書と〈仮死〉——

本学博士課程後期二年次 伊藤里和氏

◆午後の部(講演会) 十三時三十分～十六時三十分

「萬葉集」を読む——坂上郎女歌の方法——
本学教授 平館英子氏
晴れのきものと身近なきもの

作家 青木 玉氏

懇親会 十六時四十五分～十八時十五分

於ウイミン

青木氏の講演は、内容とともに、そのお人柄と話術で聴き手を魅了する素晴らしいものでした。研究発表、講演と、充実した晩秋の一日となりました。

講演要旨

「晴れのきものと身近なきもの」

作家 青木 玉

九年前、こちらに寄せていただいた時から、同じ延長線上の生活を続けてきた私が、特別お話しするほどのものはないように思うが、この一年半ほど、和服の流れを心掛けて見てきた。それで、自分と着物との繋がりとその理由、着物の先行きに対する思いなどを話してみたい。

私の母は明治三十七年の生れで、ずっと着物を着通した。必要なときにはズボンにジャンパーということもあったが、体に添わせて着付ける着物に慣れた母にとって、洋服の型に嵌め込まれたような着心地は、不自由なものであったようだ。

着物の型は、子供から大人まで、すべて同じである。一つの縫い方を覚えれば、基本が出来、他のものは全部そこから派生していく。洗い張りも自分達の手ですることが出来た。着物は普段のものであった。しかし現在、晴れ着となった着物は、常普段着るものではなくなってしまうた。

母の作品に「きもの」というのがある。小さい時から着物の着心地を気にする女の子・るつ子の成長が、衣服を通じて鮮やかに描かれている。この作品の連載が二十七回を数え、いよいよこれからという切替えの時、多忙であった母は、ここでいったんお休みを取ることにした。

ところがその前から、斑鳩(いかるが)にある法輪寺(ほうりんじ)の三重の塔の再建の話が進

んでいた。祖父には「五重塔」という作品があり、私共の家では、塔というものに、特別な思いがある。母は実際に塔が建てられるところを見るため、奈良に仮り住みをした。東京に帰った時には、七十才になっていた。

「きもの」にとつて更に意外なことが起きた。静岡県岡島の境にある安倍峠に楓の純林を見に行ったときのこと、母はそこで大谷崩（おおやぐず）れの岩やら土塊の崩れ落ちる景色に出会い、大きな衝撃を受けたのである。それから母は各地の崩壊地をたずね歩き資料を読み、半年後には『婦人の友』に「崩れ」の連載を始めた。

そして、「きもの」が書き継がれることはなかった。母の心をゆさぶった出来ごととは、どれもその時を逃すことのできないものだったのに比べ、「きもの」は、何時でも書きはじめられる知りつくした内容だったことが裏目に出てしまったのだ。

「崩れ」の区切りがついた時、今度はきものその後篇をといわれながら、母は気乗りのしない様子だった。私は、それが惜しくて、何とか書き続けて貰いたいと、何か役に立つことはないかと聞いた。その時母は、気持ちには嬉しいけれど、今、着物を着ている人を見ることは殆どないし、これから増えることもないと思う。着物の楽しさ、美しさ、面白さをいくら書いたとしても、実際に着る人がなければ、話はそれまでじゃないか。共感がなければ、誰も読まないよ、と。母の気持ちを知って、それでも書いてほしいとは、言い出せなかった。

「きもの」は母の没後、単行本になった。この本の装丁に母の着物を使いたいと申し出があつたが、主人公の年令を考えると母の着物では地味である。なんとか派手なものを、と、母が作つてくれた私の羽織のデザインを生かして思いがけなくいい装丁が出来た。

このことをきっかけに、私は母の着物について改めて考えるようになった。母の全集の出版に合わせて、「幸田文の筆筒の引き出し」の連載を一年続け、母の着物につながる取材を受けることが多くなった。出来ればその時、私に母の着物を着てもらいたいという希望が出された。



一人で着物を着ることは出来たし、残された着物は丁度私の年令に合うものでもあった。だが親子といえども、体形は異なる。しかし一番の悩みは、何といつても母ほど恰好よくは着られないということだった。

母の着物を着ることが、すっきりした母のイメージを損なうならば、着ない方がむしろいい。毎回毎回、衿は、襷先は、裾は、帯は、と、一人母の姿見の前で、と見こう見した。それが何度も着るうちに気持ちの余裕もでき、肩の力が抜け、布地のくせものみこめて、この頃は以前よりは落ち着いてきたように思う。

母の着物に馴れようとするうちに年月が過ぎた。今度は、色により柄によつては、私の方が老けてきたことに気が付き、相談に乗ってくれそうな人を訪ねて、京都まで行つた。行き過ぎもせず、半端にもならず地味に押えてゆくという注文は一番むづかしい。初対面で、母に逢ったこともない人が、母の好みを理解し、それを損なわずに手を加えることができるだろうか。急がせることはするまい、仕損なつても文句は言うまい、と心に決めて預けた。

然しそんな心配をするまでもなく、希望以上の仕上りを見せて品物は返ってきた。今の世の中で、滅多にない人に巡り逢うことが出来た。

私は子供の頃、母が洗い張りをしていると、何か手伝いたくて側でちよこちよこしていた。なかでも、乾いた布を板から剥す時のたのしきは格別だった。白絹を剥して煽り、風をはらませ、反対

側へまわして、落ちきらないうちに二つ三つとたんでいく。他愛ないことだが、母親と一緒に、何時もとは違うことをした満足感は、何にも換え難い懐しい記憶なのだ。その風景は、今どこにも見当らない。晴れ着となった着物の手入れは、すべて玄人の手で行われるむづかしいものになってしまったのかと思うと、さみしい気がする。

今、洗い張りの仕事はどうなっているのだろう。京都の人をわずらわせて、実際の仕事場を見せてもらった。そして改めて着物を取り巻く状況が如何にむづかしいかを知った。

張り板を使う方法は、大きなローラーを熟して、一反の布をあつという間にきれいに仕上げられる仕組に変わっていた。その一方で、昔からの湯のし釜も時を越えて働く。新旧混在の中でいずれ消えるものもあれば、また新しい機械が稼動する時を迎えるかも知れない。

そこで働く人達も、跡継ぎのいない業種もあれば、母から娘へ自然に仕事を受けつがれる姿もある。そうかと思えば、働き盛りのデザイナーの要求を、形にしていく年配の人がいる。

ほんの僅かの時間に見聞きした断片でしかないが、着物に関連する膨大な数の職種、そのなかで伝えられて来た人々の思いは計り知れない。だが、現場で伝えられる微妙な加減は、渡す相手がなければ人ともに消えてしまう。そうして、昔の布や色の作り方が失われていく。また、考えぬいて作り上げたものが、高価で誰も手が出せないとなったら、作り手としてもどんなに張り合いが

ないことだろう。

一時期に比べると、着物を着る人は確かに増え、以前着ていた人は余裕のある楽しみ方をする人が多くなった。こういう方々には、これからも着物を様ざまに着こなして頂きたい。そして今、着物を着はじめられた若い人達がある。この世代には、是非着つづけて頂きたい。着つづけて、気に入った着物と対話を深めて、その先にある面白さ、思いがけない効果を実感として享受して頂きたい。

かつて、紙布（しふ）という和紙を細く切つて縫をかけ、緯糸（よこいと）として布を織つて着た時期がある。一見、木綿と見分けがつかないほど丈夫で暖い布で労働着として最適であった。ぼろぼろになったこの布が北区の紙の博物館に保存されている。これを見た時、私は胸がいっぱいになった。決して立派な着物ではないけれど、人の身を守って労働に堪える飛び切の布である。着た人はこの布のよさを知りつくし、着られなくなつても、時を経て博物館に納められるまで手離さなかった。もし作った人がそれを知ったら、どんなに嬉しいだろう。着るものを愛した思いがここにある。

とかく着物というと華やかさ美しさ、そのために手数（てかず）をいとわず最高を望みがちに考えられる。しかしそうでないものでも、自分が選んだものは、色なのか模様なのか、布の風合（ふうあい）なのか繰返し確かめて、楽しむことをお勧めする。

私がこの思いを持つのは、「きもの」の後篇を母が止めると言った時、説得する力がなかったことにある。誰も読まないものを書くことを母に求める悲しさで出来なかった。だがこのところ、何時まで続くか頼りなくはあるものの着物を着ようとする若い人達がある。生まれ育った風土の中で、母もおばあさんも、それ以前の様ざまな人達が着続けてきた着物に、伝え切れない一人一人の楽しさがあることを身近かな感覚として持つて頂きたいと思っている。

『萬葉集』を読む―坂上郎女歌の方法―

本学教授 平舘英子

大伴坂上郎女竹田の庄より女子大嬢に贈る歌二首
うち渡す竹田の原に鳴く鶴の

間なく時なし我が恋ふらくは(巻4・七六〇)
速川の瀬に居る鳥のよしをなみ

思ひてありし我が子はもあはれ(巻4・七六一)
奈良朝を代表する歌人の一人である大伴坂上郎女が、大伴家の莊園があったと推測される竹田の庄から、都にいたる娘大嬢を思いやつて詠んだ歌で、二首は共に鳥を詠む景を序詞としながら、見事な対比的構成を持っている。七六〇歌の序詞は竹田の原の静寂な広がりの中に遠くとぎれなく響く鶴の鳴き声に空間の広がりと時間の継続を示し、そこを鶴の声が覆っているという聴覚の世界

を形成して、娘に対する郎女の心情に重ねている。対して、七六一歌の序詞は早川の急な流れのその瀬に不安げに居る鳥の姿が視覚の世界を形成して、そこに奈良に一人残る大嬢の姿に重ねている。二首は、序詞において静の面に対する動の線という空間的把握の対比、広がりが続く鳴き声に対して萎縮し続ける姿という鳥の景の対比、さらに聞こえて見えない名のある大きな鳥と見えて聞こえない名のない小さな鳥との対比を素材に、聴覚と視覚を刺激する二様の鳥を意匠して、自ずと人の心情に重なる景の情趣を捉えている。そこに、坂上郎女の自然を観照する確かなまなざしが窺える作品である。こうした景情融合した作品は、奈良朝初期の自然詠をよくした山部赤人等にもまだ見られない。坂上郎女がこうした作品を歌い得た要因を坂上自身の在り方と主題となっている鶴や鳥―特に名の挙がっている鶴を詠むという方法の二つから探ってみた。

坂上郎女は、大伴旅人の妹で、『萬葉集』の編者でもある大伴家持の叔母。作歌の上でも家持に影響を与えたとされる。若い時に穂積皇子に寵愛され、皇子薨後は藤原京家の麻呂が通ったが、異母兄弟の宿奈麻呂と結婚して娘を生んだことや大伴家の家刀自としての役割を担ったといった履歴が知られている。そうした履歴を反映するように、郎女の作品の内容は母性の表明、親族の宴席での即興的な贈答、祭神歌、そして相聞歌が主で、家刀自として、或いは女性としての立場が窺える。当該の作品も内容は母としての情愛の表明であ

る。しかし、その表現方法には独自の率直さと巧妙さ、又言葉に対する確かな理解が窺える。ことばのリズムを意識し、ことばに喚起される情感と、それとは裏腹なことばの実体を鋭く歌い出すという、ことばを表現の方法として捉える認識がある。ことばは人と人とを繋ぐ絆としてあるものの、しかし、そこへの信頼のよろさを体験として詠む郎女は、ことばを使うこと自体への反省を初めて口にした歌人でもある。ことばの表裏を見いだし始めた郎女はことばを駆使しつつ、そこに現実を見据えてもいる。坂上郎女の多彩な表現方法は或る意味では近代的とも言えることばの把握に基づくが、一方で祭神歌に見るように古代的、呪術の世界にも向けられた関心にも基づいている。自然の景と情感との融合といった方法への指向に、ことばが形成する世界への郎女の独自の感性がまず考えられる。

自然詠とは異なる景情融合の表現を考える為には、「鳴く鶴」を考える必要がある。鳥の中で、その鳴き声が「くが音」とあるのは『萬葉集』中では「鳥が音」「鶴が音」「雁が音」のみである。声があくまで現実で発せられ、耳にする音であるのに対して音は情緒を込めて把握される音である。鳥の中で鶴の鳴き声は甲高く非常によく通る。「鶴が音」の早い例は古事記歌謡「天飛ぶ 鳥も使そ 鶴が音の 聞こえむ時は 我が名問はさね」(記八五)に見える。「鳥の使」は記紀神話の天若日子譚に「雉の頓使」とあるように日本古代の発想にあり、それは高く飛翔する鳥の鳴き声の靈妙

さを感じたことに基づくものである。「我が名問はさね」は姿は見えずにその声のみが遙かに聞こえる、その靈妙さが遠く離れた恋人を繋ぐ使いとして感得されている事を意味する。鳥の「音」はその記憶を伝えるものとしてあった。「鶴が音」はそうした古代的な記憶を負って、むしろその生態から相聞的情調を負いつつ生活感覚をも伴う自然詠の中に位置を持ったが、「雁が音」はそうした古代的な発想を離れ、中国の六朝文学の影響の下で雁信の故事を含む詩題の世界との接点を持つことで、季節観との交渉に表現の場を得て、歌の世界に展開していった。自然詠から詠物歌へと展開の中で「鶴が音」から「雁が音」への交替が見られる。坂上郎女の二首の作品は、そうした交替期にあつて、独自のことばへの感性がより古代的な生活感の有る鶴とそれに対比される名もない鳥とを詠むという構成性を持つことで、自然詠に留まらない景と情の融合という新しい世界を開いたと考えられる。

二〇〇六年四月一日

発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一
日本女子大学 日本文学科内